女房的肉眼

―歌合せ―

後深草上皇の御所に仕えていた二條という女房の日記であります。

『とわずがたり』は、

『文化』田清輝

かの女の一生のうちで、いちばん、大きな社会的事件としてはおそらく元寇でありましょう。しかし、元寇がとりあげられてるのは、たまたま、産褥につかれたかの女のもとをおとずれた恋びとの阿闍梨が、「さて近頃は九州に蒙古の襲来のことなどあって、何かと謹慎しなくてはならない頃ですが……」とかの女にむかって物語る一句だけなのです。すくなくとも冨倉徳次郎の現代語訳では、そうなっています。しかるに、なべて世の中慎しきこと……」というくだりを、パラフレーズしたものであって、つまり、原文には、蒙古の襲来云々といったような言葉は、一言半句といえどもみあたりません。ゲオルグ・ブランデスは、アンデルセンの

文阿堂製
No. 4